海冥

かいめい

小田実

太平洋戦争にかかわる十六の短篇

太平洋戦争をめぐる一人の短編

海冥（かいめい）
太平洋戦争にかかわる十六の短篇

一九八一年八月二十五日　第一刷発行

著　者　小田実
発行者　三木章
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）　振替東京八―三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂
定　価　九五〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

© Makoto Oda 1981, Printed in Japan

0093-183886-2253 (0)　（文1）

目次

海のいくさ 7
船 23
骨 41
肉 59
姦 73
風呂 89
男 105
P—島にて 119

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

指揮官 135
卒 151
雲、あるいは、愛 171
ジャップ 187
ジョギング 203
海を眺める墓地 217
太平洋の話 233
舟 249
あとがきとしての鎮魂歌 267

著者写真撮影　野上　透
装幀　辻村益朗

海冥（かいめい）

太平洋戦争にかかわる十六の短篇

海のいくさ

I

土のいくさと海のいくさがあった。

土のいくさのことは聞いていた。「麦と兵隊」ということばがある。あるいは、「泥と兵隊」。どちらも、高名な小説の題名だったが、子供はそんなことは知るはずがない。それで、ただのことばだった。ただの、土のいくさのことを言いあらわしたことばとしておぼえていた。

いちめんの黄色い麦畑のなかを兵隊が行軍して歩く。連想の基調の色彩は黄色で、だから、いちめんのコーリャン畑でもよかった。土と植物の匂いに混じって、兵隊の汗臭い衣類の匂いがする。戎衣の匂いというものだ。それから機械油の匂いだ。これは機関銃に塗った油の匂いだろう。あるいは、腰にぶら下げた銃剣、ゴボウ剣の油の匂い。

しかし、連想は麦よりも圧倒的に泥だった。涯てしなくつづく泥の道、いや、道なき道を、泥んこになった兵隊の泥だらけの軍靴が動く。一歩一歩、ずぶずぶとそれは泥のなかに踏み込む。野砲

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のワダチがそこに沈み込む。馬が立ち往生する。指揮官が叱咤する。どなる。しかし、兵隊は黙々と歩く。泥のなかを這うようにして動く。

くたびれていた。子供心にもそれはよく判った。そのころは子供でも遠足を「行軍」と称して、今ならバスで一日がかりで行って帰って来るほどの距離をただ歩いた。歩くことだけが目的だったから、くたびれ果てた。ものが言えなくなるぐらいくたびれても、歩かないと帰りつかないのだから歩く。靴ずれもマメもつくった。それでも、歩いた。

そういうこともあってか、泥のなかのくたびれはよく判った。からだで感じとられた。連想のなかで、自分でもくたびれていた。泥にもまみれている。雨のなか、つまり、泥のなかを歩かされたこともあったのだ。先生が言った。皇軍の将兵は大陸で苦労しているぞ。これしきの雨。子供も歩いた。泥にまみれて。

くたびれて、兵隊は泥のように眠る。夢は見ない。見たとしたら、故国の山河のなつかしい夢だ——と、そのころ先生が作文で書かせたがっていたようには連想は動いて行かなかった。泥の眠りのなかに夢はなかった。しかし、それでも、あったとしたら——

泥の夢だろう。泥の海が涯てしなくつづく。それが夢のなかいっぱいにひろがる。そして、そのうち夢のワクを越えてからだのうちいっぱいにひろがり、からだが泥でつまる。息がつまる。

そこで恐怖に馳られて大声をあげて眼をさまして母親をおどろかせた、というのではない。やはり、そこは眺めていた。ふしぎに三人称の夢じみていた。泥は、雨中の「行軍」の経験にかかわらず、遠かった。

わたしは土のいくさの現場、いや、土のいくさのあった現場を見てはいない。大陸は夜行列車で

かすめただけだ。大陸の涯ての半島の北の首都から大陸の首都めがけて週二回、夜行列車が走る。いや、かっきり二十四時間かかる汽車で、出発と到着は午後何時かの時刻だったが、途中のかつて土のいくさのあったとおぼしきあたり、そこでは深夜になっていた。寝台車の四人用の車室にはわたしひとりがポツネンといて、窓の外にひろがる闇に対していた。見ていると言うよりは対しているという感じのたたずまいでわたしはいたが、そのうち奥ゆきのあるたれ幕のようにわたしのまえにあったものが不意に白っぽくなった。光線のかげんかと思ったが、そこにぎやかに灯火のつらなりなどがあるはずがない。雪が積もっていたのだ。いや、そのうち、たれ幕が奥ゆきごとかすんだ。雪が降り始めたのだ。と言うより、私の孤独な夜行列車が雪が激しく降っている闇の空間のなかに突っ込んで行ったというわけだろう。窓の外の吹雪をぬくぬくと室内から眺めているほど安楽な境地はないというような話だったかコトワザだったか、西洋ダネのそういうのがあるが、人気のない車内はそれほどのぬくぬくしさにみちていたわけではない。けっこう冷えていて、防寒用のぶあついコオトをわたしは引きかぶっていたが、それにしても、窓ガラスがたれ幕とわたしのあいだを隔てていて、そのうち雪の吹き降りがあまりに激しくなって来たのだろう、何も見えなくなった。闇というものは無ではなくてあれは見えるものなのだが、窓の外はそのときまるっきり無になっていた。

土のいくさが不意に海のいくさになっていた。土のいくさは泥のなかで停滞していたが、海のいくさは動いた。一路南へむかって動き、そして、急に停滞した。

むかしむかし、島には七人の兄弟が住んでいました。お父さんとお母さんは死に、七人は七人だ

けでくらしていました。村の近くの大きなバニヤンの樹にこびとも住んでいました。

ある日、いっとう上のお兄さんが弟たちにむかって言いました。みんなで畑へ行って、ヤムイモを植えよう。そこで、いっとう下の弟だけを残して、みんなは畑へ行きました。いっとう下の弟は家でお兄さんたちのために食事の準備をすることになったのです。お兄さんたちは彼のために竹の笛をおいていきました。みんなが畑に出ているあいだ、彼をたのしませようと思ったのです。

お兄さんたちが立ち去ったあと、いっとう下の弟は食事の準備を始めました。まず火をつけ、ヤムイモを火の上におきます。ヤムイモが焼き上ったところで、きれいにして、葉っぱの皿にのせましたが、それは畑からお兄さんたちが帰って来たときにいつでも食べられるようにするためでした。

ヤムイモを焼いているあいだ、ときどき料理の手を休めては、笛を吹きました。バニヤンの樹のなかにいたこびとは笛の音を聞いて、音が好きになりました。やって来て、少年に、ちょっと火をくれないか、と言いました。少年は答えました。いいよ、その大きな、燃えている枝を持って行けよ。こびとは枝を取りましたが、少年はさらに焼き上ったヤムイモもやりました。それから、こびとは立ち去りました。

しかし、彼はやがてまた戻って来て、また火をくれと頼みました。それでは、最初の枝はどうなったかご存知ですか？　彼は食べてしまったのです！　彼は少年には火は消えてしまったと言いました。同じことを何度もしましたが、少年はそのたびに枝とヤムイモをやりました。あげくのはて、火はなくなったし、ヤムイモももう家にはありませんでした。最後にやって来たとき、こびとは少年の手から笛を奪い、バニヤンの樹に笛もろとも逃げて行きました。

小さな少年は大声で叫びました。畑にいたお兄さんたちは少年の叫びを聞いて、あわてて掘り棒を手ににぎりしめたまま帰って来ました。何が起ったんだねと家に帰りつくとすぐ彼らは訊ね、少

年は火とヤムイモと笛に何が起ったかを答えました。お兄さんたちはみんなでバニヤンの樹のところに馳けつけ、石オノで樹を伐り倒しました。こびとは笛を口にくわえてそこに坐っていました。そして、彼はお兄さんたちにむかって言います。あんたらがオレを殺せないなら、オレのほうがあんたらを殺すね。それから、あんたらをみんな食ってしまう。笛はオレのものさ。このことばを聞いて、お兄さんたちはみんなひどく腹を立てました。彼らは弓矢を取りました。コン棒と槍もです。みんなして、まもなくこの醜い小さなこびとを殺しました。それから笛を取り返して、家に帰りました。

今日このごろ、きみが村に行くなら、村人は大地に横たわっているこびとを見せるでしょう。兄弟のほうも近くにむらがっています。もちろん、ほんとうの人間ではありません。みんな、石です。

「合格」ということばを聞いたとき、少年の全身はにわかに熱くなった。白いパンツ一枚で痩せた上半身を白衣の軍医の試験官のまえにさらけ出している気恥しさはその一語でたしかに消えた。熱くなったからだに一本シンが入ったようにじんわりと力がみなぎっている。

からだ全体が太くなって、少年がいつも気にしている細い手足も太さが二倍にもなっていた。そんな感じで陸軍病院の長い板の廊下を代用ゴム底の草履でわざとペタペタ音をさせて歩いて出ると、そのまま、疎開先の伯母の家へは帰らないで学校へ行った。日曜日だったが、今川は学校近くの何んでも屋の長男だったから、休日でもしょっちゅう学校に来ていた。もっとも校庭でバッタリ出会ったところで、級友には誰ひとり受験のことは言っていなかったから、今さらこちらから「合格」を吹聴することもなかった。どうせ、そのうち知れることだ。黙っていたほうがおくゆかしい

感じだったが、そんな思惑より少年はただ背丈は同じながらからだつきは彼の二倍も三倍もしっかりしている組随一のガキ大将のまえに黙って立っていたかった。からだが全身で「合格」という二文字になっていた。そういう感じで立ちふさがっていたかった。

彼の「志願」のことを知っているのは、担任の吉岡先生だけだった。彼には口止めをたのんであったのだが、もちろん、彼は応募は少年の父親、母親、あるいは、少年が縁故疎開にひとりで来ている先の少年の伯父、伯母によって許可されたものだと信じているだろう。願書には「保護者の同意」を求める欄があって、そこには父親の名前を書きしるしたあとに印鑑が押してあった。少年が自分で書き、同じ姓の伯父の印鑑を拝借して押したのだ。

今川は少年の細い手足と痩せたからだつきを見て、そんなからだで戦争に行けるかといつも嘲笑していた。いや、いつもではなかった。二人きりでいると、ガキ大将は案外心やさしいところを見せて、おまえも疎開で親もとを離れてたいへんやな、しっかりせエよと兄貴のような口のきき方をした。それが人数がひとりでもふえると、たちまち嘲笑となり悪罵となってとめどがなかった。戦争に行けるかのあとは、だから、おまえら大都会の人間は駄目なんだということであった。ガキ大将はいろいろ言ったが、要はそういうことだ。今川が生まれ育った土地も田舎ではなくて地方都会だったが、地方都会は大都会とくらべると決定的に田舎だ。それにその地方都会は「軍都」として知られた都会だった。師団司令部があって、陸軍の学校があって、大きな陸軍病院があった。少年が身体検査を受けて「合格」のおスミつきをもらったのもその木造の病院でだ。

今川の姿は学校のどこにも見えなかった。用事ありげに歩きまわっているうちに木川田先生に出くわした。木川田先生も今川同様、少年は苦手だった。くたびれた中年男の担任の吉岡先生とはちがって、体操が得意で、まだかなり若かった。人気もあった。ひとつには彼がかつて召集されて戦争に行っていたことがあるからだろう。以前のことで、したがってそのころの少年たちがこぞって

期待したように南方での海のいくさの体験者ではなかったが、それでも、彼はとにかく戦争に行っていた先生なのだ。なみの先生とはそこでちがった。

少年が彼を苦手だったのは、彼も少年の細い手足と痩せたからだを嘲笑した人間だったからだ。少年は彼の、からだを鍛えんと御奉公できんぞということばをそんなふうにとっていた。一度言われたことがあるきりだったが、大陸での土のいくさの体験者は少年をじろりと見てからそう言った。

木川田先生はあかい顔をしていて、酒に酔っているように見えた。実際、息にかすかにアルコールの匂いがした。少年が「合格」のことを彼に告げたのは、先生がそのかすかにアルコールの匂いのする息まじりに、先生はまた戦争に行くぞと言ったからだ。再度の赤紙が来たのだとか言った。今度は南方だ。帰れんな。芝居がかりに自分で念を押すようにつぶやいたのに上から先生のからだ全体におおいかぶせるように、ボクも行きますと少年は言った。たかぶった声ではなかった。落ちついた声が出ていた。

「合格」は身体検査に関してだけだが、一週間後に行なわれる学科試験のほうには自信があった。身体検査が少年の気がかりの最大のものだったから、少年がもう、その国民学校を終えたばかりの少年たちを集めて飛行機の乗員を養成する学校に入った気になっていてもふしぎはなかった。もとは民間機の乗員を養成する目的のものだったのが、今は軍の学校のようになっていた。だから陸軍病院で身体検査も行なわれたのだが、そこを出ると予備の下士官にはなれた。

ボクも行きます、のあと少年は「合格」のことを彼に告げたが、彼はあかい顔をしたまま、かすかにアルコールの匂いのする息をはきながら、それはよかったなと言ったきりであとは黙っていた。彼の表情は茫としてとらえどころがなかったが、南の海のいくさの「戦友」どうしがそこに立っている。少年にはその感じがたしかにあった。おまえもがんばれ。しばらく経ってようやくこと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com